
第 I 部

歷史的前提条件

第 1 章

カザフスタン独立国家形成の前提について

はじめに——二つのアイデンティティ、カザフスタン共和国と
カザフ民族——

カザフスタンはカザフ人の国であるとともに、ロシア人をはじめここに住む多くの民族の国でもある。日本ではどちらかというところ、CISの他の国についての時も同じであるが、名称民族であるカザフ人の国とのみ考えがちであるが、一概にそうとはいえない。カザフスタンは、CISの12の共和国のなかでも、多民族性において最も際立っているからである。

すなわち、カザフスタンには旧ソ連に居住する百以上の民族のほとんどが住んでいるばかりでなく、名称民族であるカザフ人は人口の半分以下、表1-1に示すように1959年には30%、94年には44.3%と半分以下しか占めず、第2の民族であるロシア人がそれぞれ42.7%、35.6%という大きな比重をもっている。カザフ人は1930年代前半の全面的集団化期には人口を減らしたが、第2節に述べるように、その自然増加率がロシア人とは桁違いに高いためその後急激に増加し、他方ロシア人はソ連解体後ロシアへの移住があり減少したとはいえ、79年までは最大の民族であった。

カザフスタンはまたロシアに次いで広い面積をもっており、地域的にその民族構成に違いがあることは、表1-2に示した。しかもその領土は、ソヴェト時代になってからだけでも、図1-1のように大きく変わり、首都も初め

表1-1 カザフスタンの民族構成

(単位：人，カッコ内%)

	1926	1939	1959	1970	1989	1994
合 計	6,503,006	6,082,000	9,294,741	13,008,726	16,464,464	16,870,362
カザフ	3,713,394 (57.1)	2,327,625 (37.8)	2,787,309 (30.0)	4,234,166 (32.6)	6,534,616 (39.7)	7,474,478 (44.3)
ロシア	1,279,979 (19.7)	2,458,687 (40.0)	3,972,042 (42.7)	5,521,917 (42.4)	6,227,549 (37.8)	6,041,586 (35.6)
ウクライナ	860,822 (13.2)	658,319 (10.7)	761,432 (8.2)	933,461 (7.2)	896,240 (5.4)	856,665 (5.1)
ドイツ	51,102 (0.8)	92,571 (1.5)	658,698 (7.1)	858,077 (6.6)	957,518 (5.8)	613,820 (3.6)
タタール	80,642 (1.2)	108,127 (1.7)	191,680 (2.1)	287,712 (2.2)	327,932 (2.0)	330,584 (2.0)
ウズベク	213,498 (3.3)	120,655 (2.0)	135,932 (1.5)	216,340 (1.7)	332,017 (2.0)	371,662 (2.2)
ベロルシア	25,614 (0.4)	- (-)	107,348 (1.2)	198,275 (1.5)	182,601 (1.1)	177,615 (1.1)
ウイグル	- (0.2)	35,409 (0.6)	59,840 (0.6)	120,881 (0.9)	185,301 (1.1)	- (-)
朝鮮	- (0.8)	96,453 (1.6)	74,019 (0.8)	81,598 (0.6)	103,315 (0.6)	- (-)

(出所) 木村 [1993], 263ページ; Galiev [1994], p.8.

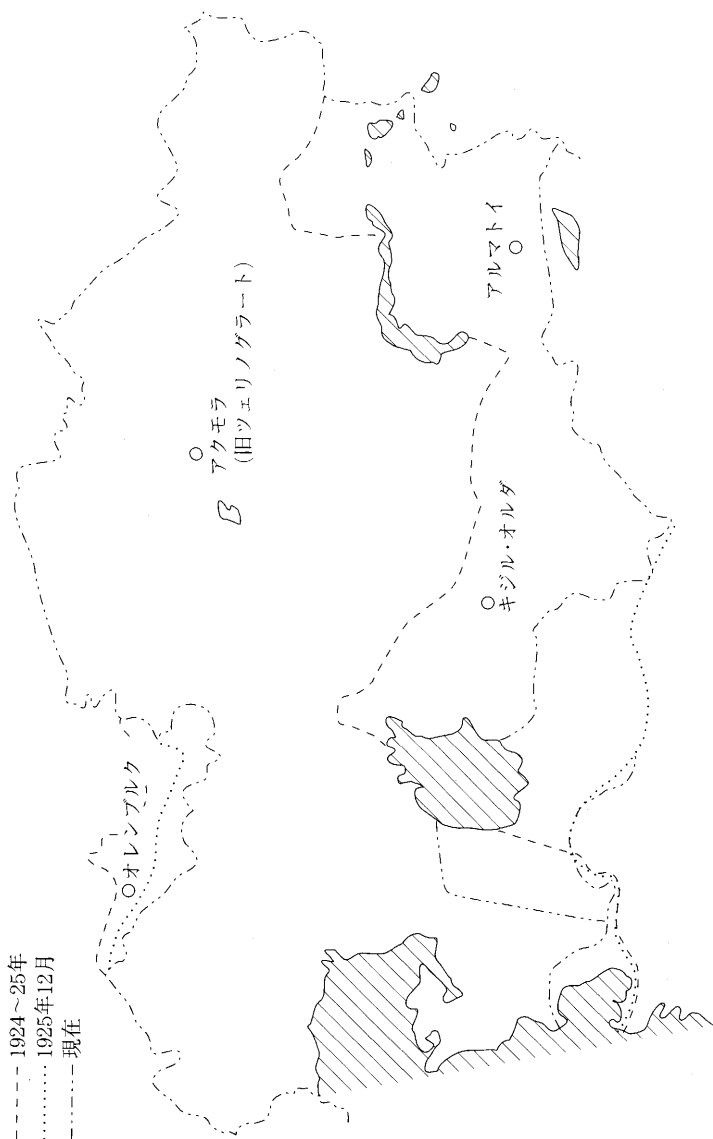
表1-2 地域別民族構成 (1989年)

(%)

	西部	北部	中央部	南部	東部
カザフ (人)	60.5	26.3	32.1	51.3	40.0
ロシア	26.5	44.8	40.1	29.4	51.1
ウクライナ	4.7	9.8	6.5	2.5	2.0
ドイツ	1.3	10.3	7.8	3.2	4.2
タタール	1.8	2.3	2.8	1.5	1.6
ウズベク	0.0	0.0	0.3	4.0	0.2
ウイグル	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0
ベロルシア	0.6	2.4	1.9	0.5	0.5
朝鮮人	0.0	0.2	0.8	1.0	0.4

(出所) Galiev [1994], pp.35,36.

図1-1 カザフスタンの首都と国境の変化



て自治共和国が形成された時は、カザフ人がわずかしかな住まない西北のオレンブルクに置かれた。その後の国境の変化によってこの都市は現在はロシアにある。首都はオレンブルクから1925年には南部のキジル・オルダへ、さらに29年には当初自治共和国に含まれていなかった南東の隅のアルマトイに移転し、今日は北部のアクモラ（アクモリンスク、ツェリノグラード）への移転が決定されている。

たしかにカザフスタンには旧ソ連のカザフ人の8割以上が住んでいるが、それ以外の民族の国でもあるということ、すなわち多民族国家カザフスタンというところにもつとめてアイデンティティを求めているのであれば、カザフ人以外の民族は排除され、ロシア人ひいてはロシアとの関係が破壊され、カザフスタン自体が成り立たなくなってしまうであろう。

CIS 諸国はどの国もロシアとの関係が重要であるが、なかでもカザフスタンがその問題を最も真剣に考えざるをえず、指導部にロシアとの関係、CISの強化という主張が強いのは、このような国内的条件にもよるのである。本章では、以上に述べたようなことを念頭に置きながら、カザフ人およびカザフスタンについて、地理、民族構成、国家、経済、政党、宗教など歴史的、総合的に考察する。

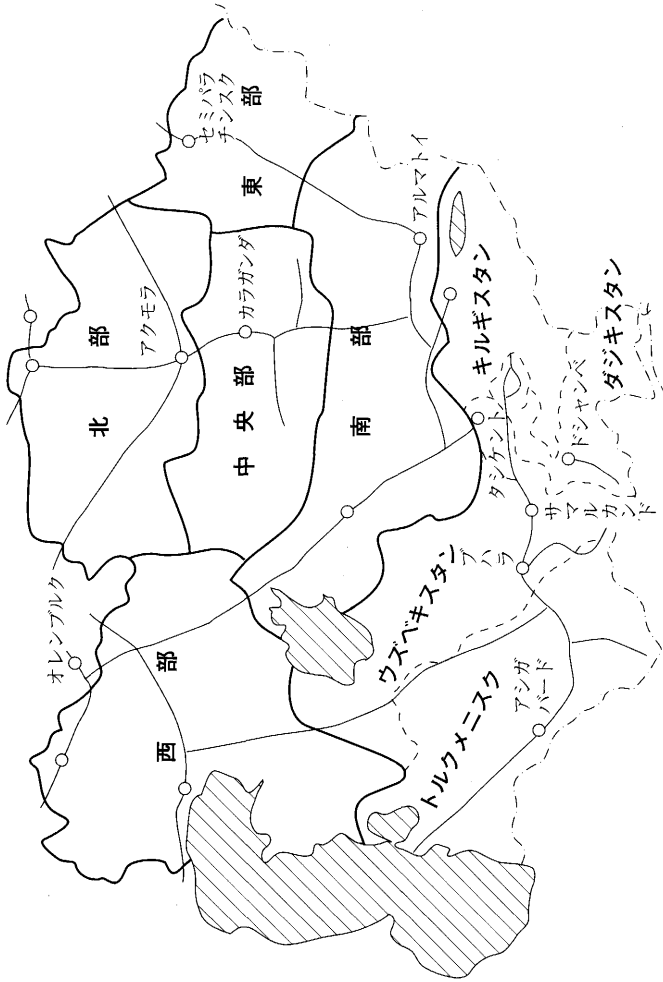
第1節 カザフスタンの地理的条件

カザフスタンのアイデンティティについて考えるために、まずその地理的条件について述べておきたい。

この国は、北をロシア、東を中国新疆ウイグル自治区、南をウズベキスタンなど CIS 中央アジア諸国に接し、西はカスピ海をへだてカフカスに面している。全体として冬は寒く夏は暑い大陸性気候で、降水量は少なく、その面積の3分の2以上は砂漠か半砂漠である。

カザフスタンは広大であるが、ソヴェト期図1-2に示したような、大き

図1-2 カザフスタン5地域と他の中央アジア4共和国略図



くそれぞれが特徴をもち、社会的・経済的潜在力が異なり、かなり自給自足的な五つの地域が形成された。(Galiev[1994], pp.31-36)

まず西部は、カスピ海沿岸低地とツラン低地があり、砂漠が多く、水が乏しく、自然的・気候的条件は良くない。都市は人口20万人程度のものが三つあるのみで、その住民はスラヴ系のロシア人、ウクライナ人とカザフ人である。マンギシラク州の天然ガスと石油の開発がアメリカ資本の導入などによって進んでいる。工業はこの燃料・採取業の他、機械製作業である。農業は追込み放牧でカザフ人によって行われている。南はトルクメニスタンと国境を接する。トルクメニスタンは天然ガスなどを豊富に埋蔵しているためか、CISの共和国のなかでロシアに対する独立性を最も強く主張している。トルクメン人も遊牧民であったが、民族的にはカザフ人とかなり違っており、よりトルコ人に近い。

北部はロシアの西シベリアに続く平坦な黒色、栗色土のステップ地帯で、自然条件、気候条件も良く、主として50年代フルシチョフ時代にロシア人が移住してソフホーズを作って開拓し、小麦地帯とした。機械化された処女地農業が発展し、旧ソ連第1の穀作地帯となっており、民族的にはトルガイ州の他はロシア人が圧倒的に多い。多くの都市と大規模な採取・加工工業企業がある。これらの都市もロシア人が多い。

中央部は、北部のステップ地帯から南に向けて伸びる長さ600キロメートル、幅20～200キロメートルのトルガイ凹地、その西側のトルガイ台地、東側のメルコソボーチニクの丘陵地帯から成る。1930年代炭田の開発と結びついて発展したカザフスタン第2の人口をもつ工業都市カラガンダをはじめ多くの都市があり、工業が発展している。92年の工業生産の部門別比率は重工業が88.7%、軽工業5.5%、食品工業10.8%である。自然条件と労働力の不足のため、農業は発展していない。

東部と南部の中国、キルギスタン国境地帯には、北からアルタイ、タルバガタイ、ジュンガル・アラタウ、天山の山脈が聳える。ロシアはこの地方の中国との国境を1881年に定めたが、この時多くのカザフ人が東へ逃れた。こ

のようなカザフ人の大量移住は、1916年蜂起の時期、革命後の国内戦の時期、1930年代の定住化・集団化の時期、大祖国戦争期と繰り返される。現在 CIS のカザフ人は約800万人であるが、中国の東トルキスタンにも約100万人が住んでいる。中国との国境沿いを南北に走るトルクシブ（トルケスタン・シベリア鉄道）のアクトガイからの支線に中国の北疆鉄道が90年に接続した。道路も中国と直接つながっている。

東部は地下資源に恵まれており、金属加工コンプレックスが発展している。

都市の住民は主にロシア人、農村はカザフ人であるが、その他にドイツ人、ウクライナ人、タタール人、ベロルシア人、ウズベク人、チェチェン人なども住む。

セミパラチンスクの近くには大規模な核実験場があった。多くの住民が被爆しており、ベレストロイカ以後実験反対運動が起こり、ようやく閉鎖された。核実験反対運動では、日本の原水禁運動ともつながりを持ち、日本人とはこの面で身近となった。

南部は共和国で最も労働力が豊かで、野菜・果樹栽培、畜産など農業経営に習熟したカザフ人、ウイグル人、朝鮮人が多い。スラヴ系の民族は加工工業に集中している。

南部の東側に国境を接するキルギスタンは、中央を東西に天山山脈が走る平均の標高が3000メートル近くに達する山岳国である。キルギス人は遊牧民であった点はカザフ人と共通しており民族的にも近い。カザフは最初カラ・キルギスと呼ばれていたくらいである。キルギスタンの首都ビシケクは北の国境に近く、アルマトイから自動車です3時間半の距離である。

南部の西側に国境を接するウズベキスタンは、中央アジアのなかで最大の人口をもつばかりでなく、経済的にも最も発展している。なによりも、ここでは中央アジアの他の共和国と違ってアムダリア、シルダリアの水を利用する灌漑農業が行われており、稲、綿が栽培され、世界でも有数の綿花生産地で、CIS の綿花供給地である。しかし、灌漑溝の開発と非効率な水利用、地下への浸透のため両河の水が涸れアラル海が干上がりつつあり、その影響は

カザフスタンにも及んでいる。カザフスタンに源流をもつイルティシ川などの水をダムでせき止め、アラル海に流し込むという計画もあったが、シベリアの環境への影響などが大きいとして科学者や住民の反対が強く、ベレストロイカの時期に中止された。また綿の増産のために化学肥料や農薬を大量に使用したため、土地が汚染され環境が悪化している。ウズベク人を中心とする農村の人口密度は非常に高い。この共和国の首都タシケントは、ロシアの植民地であった時から中央アジアの行政、経済の中心地として栄え、工業化によって労働者としてロシア人が移住し、工業労働者の数はロシア人のほうが多い。全体としてはウズベク人が8割以上でカザフスタンよりイスラムの伝統も強い。カザフスタンは、地理的ばかりでなく、文化的にも、ロシアとこのウズベキスタンとの橋渡しをしていると言えよう。

ウズベキスタンのかなりの面積はカラカルパキスタンが占めるが、ここは自然条件も民族的にもカザフスタンに近く、1925～30年自治州としてカザフスタンに属していた。

第2節 カザフスタンの民族構成の変化

共和国の際立った特徴をなしている民族構成について、ここで述べておきたい。

カザフスタンの人口は、CIS 諸国のなかでは、ロシア、ウクライナ、ウズベキスタンに次ぎ4番目で、1994年に1687万人である。カザフスタンを含め中央アジアの5共和国にアゼルバイジャンを加えたCISのイスラム系6共和国の人口は、90年には5800万人であったが、この年のソ連国家統計委員会の推計によれば、25年後の2015年には1億5000万人とされている（*Vestnik*… [1990], p.41）。表1-3に示したように、これらの共和国のイスラム系諸民族の人口の自然増加率が、スラヴ系の諸民族などに比べて桁外れに高いためである。

表1-3 カザフスタンの人口自然増加率等

		1991	1992	1993	1994
カザフスタン	a	21.0	19.9	18.6	18.0
	b	8.0	8.1	9.2	9.4
	c	13.0	11.8	9.4	8.6
ロシア	a	12.1	10.7	9.4	9.5
	b	11.4	12.2	14.5	15.5
	c	0.7	-1.5	-5.1	-6.0
CIS 諸国平均	a	16.0	14.7	13.5	13.0
	b	10.6	11.1	12.6	13.3
	c	5.4	3.6	0.9	-0.3

(注) a : 出生率, b : 死亡率, c : 自然増加率 1,000人当たり

(出所) Sodruzhestvo…… [1995], p.10.

カザフスタンだけをとりまいても、表1-1にみるようにカザフ人は59年の279万人から94年の747万人へとこの35年間に実に2.68倍となっている。同じ期間にロシア人は397万人から604万人へと1.52倍で、ドイツ人は減少している。

カザフ人の急増は自然増加率が高いためであるが、ロシア人の場合は流入と流出がかなりあり、特にソ連解体後は流出がめだっている。89年から94年初めまでに19万人弱、94年中にさらに25万人が流出した。減少がさらに大きいのはドイツ人で、この5年間に34万人以上、94年に9万人がドイツなどに移住し、55%になった計算となる。このような減少のため89年の3位から4位となり、ウクライナ人に3位を譲った ((Demographic… [1995], p.12)。

これらの増減によって、カザフスタンのカザフ人の比率は59年から94年初めの間に30.0%から44.3%へとほぼ1.5倍になったのに対し、ロシア人の比率は、42.7%から35.6%へ16.6%の減少、ドイツ人は7.1%から3.6%へと半分になった。

このような民族構成の変化は、カザフスタンのアイデンティティの形成にとって有利なものであった。ソ連解体のなかで強まったカザフ人のナショナ

表 1-4 中央アジアのドイツ人 (1989年)

(単位: 人)

	人口	母語			第2語	
		ドイツ語	ロシア語	共和国 名称民族語	ロシア語	共和国 名称民族語
カザフスタン	957,518	520,920	434,650	699	484,366	6,081
キルギスタン	101,309	64,214	36,933	10	58,944	313
ウズベキスタン	39,806	18,906	20,756	66	16,764	1,156
タジキスタン	32,671	19,459	13,116	51	17,377	469
トルクメニスタン	4,434	2,310	2,084	15	1,881	310
ロシア	842,295	352,116	488,460		323,195	
ソ連	2,038,603	993,812	1,035,072		917,852	

(出所) *Vestnik statistika*, No. 10, 11, 12, 1990, No. 4, 5, 6, 1991より木村作成。

リズムにある程度応えながら、しかもロシア化を修正するためロシア人に譲歩を迫っていく条件が作られたように思われるからである。また、第3の民族グループを成していたドイツ人が急減したことは、民族紛争のひとつの原因を小さくしたことになった。

ドイツ人は、エカチェリナ二世の時からロシアに移住し、ロシア革命後ヴォルガ沿岸に自治共和国をもっていたが、独ソ戦の勃発直後スターリンによって解体され、民族ぐるみカザフスタンに強制移住させられたのである。89年の CIS 諸国内の分布状況は表 1-4 に示したが、この時はカザフスタンに最も多く居住していた。

ウイグル人は、東隣りの中国に新疆ウイグル自治区をもち、今後カザフスタンが中国とのつながりを強めていこうとする時にプラスの要因として生かしていかなければならないが、他面では両国間の緊張要因ともなりうる。

朝鮮人は、1937年に極東地方から民族ぐるみ18万人がこの地域に強制移住させられて急増したものである。大戦中カフカスなどから同じくスターリンによって対独協力を理由として多くの少数民族がこの地域に強制移住させられた。

第3節 カザフスタンの民族と国家の形成

1. カザフ民族の形成とロシアの征服

カザフ民族の形成は、さまざまな遊牧種族の長期にわたる相互作用のなかで行われた。インド・イラン系種族が基層となり、紀元前1000年にはその居住地となるが、その後トルコ系種族が入ってトルコ化が進み、10～12世紀にはトルコ系のカラ・ハーン朝に支配されイスラムが根づいた。13世紀にモンゴルに征服され、14世紀から15世紀にかけてトルコ化したモンゴルであるウズベクなどに支配された後、15世紀後半にカザフ汗国が生まれ、カザフ民族社会の形成が完了した。

16世紀、カザフ人はカザフスタンの地域で大中小3つのジューズ（オルダ）に分かれて遊牧するようになり、17世紀から18世紀前半にかけ東からモンゴル系のジュンガル王国が進出してきたが、18世紀には西の中小2ジューズがロシアに服した。ロシアは、1853年にアク・メチェット（現在のキジル・オルダ）を獲得し、翌年セミパラチンスク州を形成し、ヴェルヌイ要塞（現在のアルマトイ）を築き、1867年にはタシケントを中心にトルケスタン総督府（1886年地方）をおいて中央アジア支配を本格化する。

ロシアは、1881年に清との間でこの地方の国境を定め、大ジューズの地域も併合した。

革命前アルマアタを含むカザフスタン南部、東部はウズベキスタンなどとともにトルケスタン地方に含まれ、北東部のセミパラチンスク、アクモリンスク両州は1892年以後ステップ総督府を形成していた（1892～97年セミレチエ州も含む）。1899～1905年には、カザフスタンを南北に縦断するオレンブルク・タシケント鉄道が開通する。

第一次世界大戦中の1916年6月、帝政政府は兵力の不足に苦しみ、それまで動員していなかった「異」民族を徴集する勅令を発したが、これは中央ア

ジア全域に広がる蜂起を引き起こした。特にカザフスタンのトルガイ州の蜂起は1917年の二月革命まで続いた。蜂起の指導者や徴集者の一部は、ソヴェト政権の樹立と建設のなかで活動することになる。

2. ロシア人を中心とする革命と自治共和国の誕生

カザフスタン共和国の前身であるキルギス自治共和国がロシア内に生まれたのは、1920年8月、いまロシア領内のオレンブルクにおいてであった。この時、現在の首都アルマトイは当時はヴェルヌイと呼ばれており、別のこれより早く1918年に成立した同じくロシア内のトルケスタン自治共和国に含まれていた。オレンブルクは18世紀にロシアの要塞として建設されて小ジューズ・カザフ人の支配の拠点となり、ロシアと中央アジアの通商の中心地となった。ロシア中央部からタシケントに至る鉄道の途中にあり、中央アジアの玄関である。

カザフスタンでは、1918年3月初め、ヴェルヌイのロシア人兵士とカザフ人の武装蜂起によってソヴェト政権が成立し、この月のうちにセミレチエ全体にソヴェトが成立した。国内戦のなかで、1918年7月にオレンブルクはドゥトフの白軍部隊によって占領され、中央アジアはロシアから切り離された。しかし、カザフスタン全体としては1919年末までに白軍は敗北し、1920年3月にセミレチエ北部から最後の白軍が一掃された。これらの作戦は、フルンゼ、トハチェフスキーなどロシア人によって指揮される赤軍によって行われた。

国内戦のなかで1919年7月ロシア政府は、カザフスタン地方管理革命委員会を創設し、1920年8月にカザフスタン共和国についての布告を承認し、20日に自治キルギス・ソヴェト社会主義共和国形成についての布告を採択した。10月に第1回のソヴェト大会を開き、政府を選出した。ここで採択された宣言は、「各民族があらゆる国家施設、学校で母語を使用する平等の権利をもち、どの民族も自由に民族的に発展する権利と完全な可能性を与えられ、

保障されるべきである」(S'ezd..., tom 1 [1959], c.633) と謳っている。1924年1月にオレンブルクで開かれた全カザフ・ソヴェト大会で、自治共和国の憲法が採択される。この大会の代議員の民族構成は、カザフ人119人(47.6%), ロシア人114人(45.6%), その他17人(6.8%)となっている(S'ezd..., tom 6, chast'1 [1962], c.744)。

1925年2月首都がオレンブルクからキジル・オルダへ移転され、党組織の面では、党カザフ州委員会は地方委員会へ昇格し再編成された。キジル・オルダは1820年にコーカンド汗国の要塞として建設され、1853年にロシア軍に占領された、1926年の人口2万2600人の小都市である。4月には国名がキルギスからカザフへ改称される。

1924年の民族的・国家的境界区分では、シルダリア、セミレチエの二つの州を加えた。

3. 中央アジア民族的・国家的境界区分

キルギス自治共和国の誕生当時、現在の首都アルマトイは、別のこれより早く1918年に成立した同じくロシア内のトルケスタン自治共和国に含まれていた。

中央アジアでは1924年に、革命前のトルケスタン地方(1918年自治共和国)、ヒヴァ、ブハラの2汗国(1920年人民共和国, 1923, 24年に社会主義共和国)の領域にその北のステップ総督府・ロシアの一部諸州を含む地域(1920年キルギス自治共和国形成)について民族的・国家的境界区分が行われた。これは、民族分布に関係なく行われていた旧区分では民族的な紛争が避けられないこと、土地改革をはじめとする改革を住民の支持の下に進めていくためには、社会的・経済的に慣習の似た民族を単位として区分けする必要があるという理由によるものである。

民族的な調査の結果、ウズベク人は多様であるが、カザフ、キルギス、カラカルパクの3民族はお互いに関連はあるが、身体的特徴、言語、文化によっ

て区別できることが明らかになった。このような民族的な分布の調査結果に基づき、交通や灌漑、その他地域の経済的利害を考えに入れて境界が引かれ、他の民族の領域とともにカザフ人の領域が定められたのである。カザフスタンとウズベキスタンの境界で問題となったのはタシケント地区である。この地区の民族分布は複雑で、都市ではウズベク人が多いため全体としてウズベク人46%、カザフ人26%となっているが、周辺の農村ではカザフ人が圧倒的であった。カザフ人はこの地区を全体としてカザフスタンに属するよう主張し、1924年秋全ロシア中央執行委員会に訴えている。

5月11日、ロシア共産党中央アジア局は、ウズベク、トルクメンの2共和国の創設を決め、6月12日、ロシア共産党中央委員会政治局は「中央アジア共和国民族的境界区分について」を決定した。9～10月トルケスタン共和国、ブハラ共和国、ホレズム共和国で区分が承認され、10月14日ロシア共和国中央執行委員会が承認、27日ソ連中央執行委員会が承認した。12月各共和国で民族革命委員会が構成され、新共和国の政府中央機関樹立と憲法大会選挙を準備、実施した。

1925年2月、ウズベク共和国創立大会が開かれ、続いてトルクメン共和国が創立された。タジキスタンはウズベク共和国内の自治共和国、カザフスタンはロシア共和国の自治共和国、キルギスタンはロシア共和国内の自治州として発足する。

この民族的境界区分については、スターリンによる分割支配政策の一環であるとの批判があり、実際スターリンがロシア以外の諸民族の間の結集を好まなかったことは確かであるが、民族別にいったん区分すること自体は必要な段階であろう。特にフェルガナのように人口が密集し、民族的混住が進んだところではすっきりとした区分は難しいが、区分せず一つの国にした場合には、全体がウズベク人の支配となった可能性もある。

1925年2月、キルギス自治共和国の首都はオレンブルクから、新たに領域に加えられたキジル・オルダに移され、4月には国名がキルギスからカザフに改称される。首都は29年5月にはさらにアルマ・アタに移される。

民族的境界区分のさいカザフスタン内の自治州として発足したカラカルパキスタンは、1930年にロシア内の自治州へと移管され、32年に自治共和国となり、36年にはウズベク共和国へ移管される。

4. 定住化・コルホーズ化と少数民族の強制移住

1930年代前半の全ソ連的な全面的集団化の時期には、カザフスタンでは定住化も強制され、カザフ人はシベリアや東の中国領へ大量に逃れ、また家畜を処分して餓死した。人口統計によれば、カザフ人は1926～39年にソ連では21.9%、カザフスタンでは37.3%減少している。中央アジアの他の民族はこの期間にかなりの人口を増加したので、これは例外的である。

そしてその後には、1937年には朝鮮人が、独ソ戦のなかでは41年8月にヴォルガ沿岸のドイツ人が自治共和国を解体されカザフスタンに追放されたのを初めとして、チェチェン人、イングーシ人、カルムイク人、カラチャイ人などが43年末から44年初めにかけて自治共和国などを解体されて追放され、グルジアのメスフ人は44年に、クリミアのタタール人も赤軍がドイツ軍からクリミア半島を解放した直後の44年5月に追放され、45年6月に自治共和国を解体された。これらの少数民族の追放の多くはドイツ軍への協力を理由としているが、いずれも57年以降名誉回復され、大部分の民族は元の自治共和国などを回復された。カザフスタンはこれらの諸民族の強制移住先となったために、いっそう多民族的となったのである。

5. カザフスタンの国家形成

1936年12月に採択された新しいソ連憲法によって、カザフスタンは連邦構成共和国に昇格し、翌年3月共和国憲法を採択した。これによってカザフ共和国は、教育、地域的工業、公益事業、社会保障の各共和国人民委員部(省)、食料品工業、軽工業、農耕などの連邦・共和国人民委員部をもつことになっ

た。しかし、この憲法第14条に定められているように、経済の重要部門は連邦が管轄することになっていたため、鉄鋼業、機械工業、化学工業など全連邦的意義をもつ部門の大きいカザフスタンでは、共和国の管轄下に置かれる部分は相対的に小さかった。65年に出版されたソヴェト大会文書集の解説によれば、この憲法はカザフスタンにおける社会主義体制の勝利を法的に確認したもので、共和国の勤労者は社会主義建設の完了と共産主義社会への漸次的移行の時期に入ったと述べ、カザフスタンは自立的な連邦国家として、民族国家発展の新しい段階に入ったとしていた。

しかし、92年にカザフスタン教育省が発行した2種類のカザフスタン共和国史の教科書は、いずれも、ロシア革命やソヴェト時代の経済的・文化的発展については述べているが、36年のカザフ共和国への昇格や翌年の共和国憲法の採択にまったくふれていない。これはソヴェト時代の政治への批判的態度を示しているものと考えられる。

ブレジネフ時代の77年に採択されたソ連の新憲法に合わせ78年4月カザフスタンで採択された憲法の前文では「ソヴェト人民の国家的団結を体现し、共同の共産主義建設のためのすべての民族と小民族を結束させるソ連を構成する同権の共和国である」と述べ、第68条では主権をもつソヴェト社会主義国家であることを謳っている。第74条はソ連憲法に従ってカザフ共和国の主権がソ連によって守られることを定めている（Konstitutsiya…[1978], pp. 195, 205, 206）。

しかし、90年10月、カザフ共和国は国家主権についての宣言を採択し、91年8月政変後12月カザフスタン共和国へ改称し、12月16日「共和国の国家的独立について」を採択して独立し、92年6月新しい国旗、国章、国歌を、93年1月に憲法を採択した。

憲法はまず「カザフスタン共和国が、民主的、非教権的な単一の国家である。カザフ民族によって決められた国家形態としてのカザフスタン共和国は、すべてのその成員の同権を保障する」と定めている。

第46条は、土地、地下資源、動植物界、その他の天然資源は、もっぱら国

家的所有とされることを定めている点は、ロシアと経済政策において、若干の違いがあることを示している（*Kazakhstanskaya*..., Fevralya 2, 1993）。

6. カザフスタンにおける言語

93年の憲法はまた、カザフ語を国家言語としたが、ロシア語も民族間交流言語とし、排除していない。これはカザフ語が、国家言語にふさわしい地位を占めていないという、カザフスタンにおける言語をめぐる複雑な状況を反映している。

94年7月に1169人について行われたアンケート調査によれば、カザフスタンでは、テレビをロシア語で見れる者が80.2%, カザフ語で見れるのは38.2%である。これはカザフ人についてはそれぞれ76.4%, 61.3%, ロシア人については8.8%, 96.1%となっている（Arenov[1995], p.4）。カザフ人以外の民族は、自民族語かロシア語を修得しており、カザフ語を知るものは少ない。カザフ人のかなりの部分がロシア語ができる。

同じアンケートによれば、全体として46%が自分の子供にロシア語で専門教育、高等教育を受けさせることを望み、カザフ語でと答えた者は28%である。職業別の表1-5に示したように労働者の場合、自分の子供にカザフ語

表1-5 あなたの子供に何語での専門教育、高等教育を受けさせるか (%)

	カザフ語で	ロシア語で	自民族語で	その他の言葉で	回答困難
労働者	19.46	53.69	9.40	3.36	9.40
コルホーズ員	40.74	44.44	9.26	0.00	5.56
技術者・技師	20.25	50.28	11.86	3.39	8.47
事務職員	29.69	44.37	8.07	5.73	5.99
企業家	45.00	47.50	7.50	2.50	7.50
無職	21.43	50.00	7.14	0.00	14.29
学生	34.21	31.58	0.00	2.63	2.63
年金生活者	20.63	42.06	10.32	5.56	7.14

（出所）Arenov [1995], p.6.

で教育を受けさせたい者は、ロシア語で受けさせたい者の36.7%である。

カザフ語を国家言語として定着させるには、幼年期からその教育を始めた
り、成人についても関心をもつような条件を作るなど政府の支持が必要であ
り、移行期間について地域的特殊性を考慮していかなければならないことが指摘
されている。

現在のカザフスタン国家、民族政策の標語は、「多様性のなかの統一」あ
るいは「カザフスタンのモザイク」である。これは、「一方における、民族
的特徴、民族意識、言語、慣習、伝統、総体としての民族的文化の保持といっ
そうの繁栄の可能性、他方における、相互理解、相互富化と最終的な新しい
民族（メタエトノス）社会、すなわち新しい共同体であるカザフ民族形成へ
の道を塞がないこと」（Baitenova [1995], p.32）であると考えられている。

カザフスタンのカザフ人人口の比率は、第3節初めにも述べたように、89
年から94年初めまでに39.7%から44.2%へと大きくなったが、この傾向は今
後も続き人口学者の予測では2000年には60%、2015年には80%になると見込
まれており（Baitenova [1995], p.28）、カザフ人を中心とした民族形成が進む
であろう。

第4節 カザフスタン経済の発展とロシア

ロシア革命後1928年10月から始められたソ連の第1次5カ年計画のなかで
カザフスタンでは、カザフ遊牧民の定住化と集団化が、無数の騷擾のなかで
強行された。前述したように、これをきらった多くのカザフ人が、中国領な
どに逃れ、また家畜を殺して餓死した。集団化期の家畜頭数減少は全ソ連的
な現象であったが、カザフスタン・カラカルパキスタンの場合は特に壊滅的
で、28年と33年を比較すると、表1-6のように馬はわずか13%に、牛は23%、
山羊・羊は11%になった。この時期、カザフスタン経済は、特に農業部面で
縮小し、人口は減少し、荒廃した。中央アジアのウズベキスタンなど灌漑農

表1-6 カザフ自治共和国とカラカルパク
自治共和国

	(%)			
	馬	牛	山羊・羊	豚
1928	100.0	100.0	100.0	100.0
1929	107.6	94.6	99.1	85.9
1930	87.1	64.8	60.9	-
1931	61.6	42.1	26.5	-
1932	20.1	23.7	12.1	25.3
1933	13.3	22.6	10.9	38.1
1934	12.4	27.2	13.3	64.3

(出所) Sel'skoe…… [1935], p.517.

業地帯における綿花生産が、同じ時期に飛躍的に増大したのと、著しい対称をなしている。

31年5月にはトルクシブ鉄道が開通し、アルマ・アタとシベリアがつながった。

41年からの独ソ戦は、カザフスタンにとっては、二つの点で大きな意味をもった。その一つは、30年代半ばから始まった工業建設が、ヨーロッパ・ロシアからの工場などの疎開と軍事的な後方基地の役割の増大によっていっそう進み、戦後の工業化の基礎が作られたことである。この時重点を置かれた鉄鋼業などの重工業部門はモスクワの全連邦省の管轄下に置かれたので、カザフスタン経済に対するロシアの支配は強化された。もう一つは対独協力の罪を負わされた多くの民族の強制移住先となり、多民族性がいっそう強くなったことである。

カザフスタンには、銅、亜鉛、鉛、ニッケルなど非鉄金属の埋蔵量で CIS 内で1, 2を争うほか、鉄、ボーキサイト、金、石炭、石油など膨大な資源を埋蔵している。戦後はこれらの地下資源を原料とする鉄鋼業、化学工業や機械工業、軽工業、食肉加工を中心とする食品工業、建築資材工業が発展した。この発展のなかで、カザフスタン経済は総合的に発展したが、他方では、ソ連全体の分業体制の一環としての性格も強まった。

ソ連解体によってカザフスタンの工業は大きな打撃を受け、原料・燃料の生産に依存するようになっていく。外国との合併企業も主として石油・鉄鉱石などの分野に進出しており、軽工業は、西欧・中国・韓国製品に市場を奪われている。市場経済化の進展と政府による統制の弱まりとともに、先に述べたような五つの地域への解体の傾向もみられる。

農業についても、播種面積は表1-7のように1913年には415万ヘクタールとわずかで牧畜が中心であったが、53年には963万ヘクタールとなり、その後は共和国北部でのソフホーズ建設による処女地開拓によって飛躍的に増大し、85年には3580万ヘクタールとウクライナに次ぐ穀作地帯となった。同表のように91年には1199万トンと前年の半分以下に急減し、その後は92年2977万トンに回復したが、93年2163万トン、94年1643万トンと減りつつある。綿、ビート、タバコ、ヒマワリなどの工業作物、ブドウも栽培されている。畜産は西部、中央部で放牧による牧羊が、南部では肉と酪農を中心とする灌漑農業が行われている。91年ロシアの農村人口の比率は26.1%であるが、中央アジア諸国ではタジキスタン68.4%、ウズベキスタン59.7%とまだ高い。カザフスタンは中央アジアのなかでは低いほうで42.4%であるが、農村人口の絶対数は1913年505.6万人、40年431.5万人、59年522.8万人、79年676.4万人、91年712.5万人と増加しており（Narodnoe…[1991], pp.68-73）、ロシアなど

表1-7 播種面積および
穀物生産

	面積(万ha)	生産量(万t)
1913	415	n.d.
1940	681	n.d.
1953	963	n.d.
1985	3,580	2,269
1990	3,518	2,849
1991	3,494	1,199

(出所) Sovetskaya……, tom 6
[1965], kol. 808; Strany……
[1992], pp.219,220.

と異なり、中央アジア諸国と共通の特徴を示している。畜産生産も独立後減少しつつあり、食肉は91年84.6万トンから94年41.6万トンへと半減している (Sodruzhestvo…[1995], p.56)。

カザフスタン経済は、ロシアとの関係を非常に強めている。すなわち95年1～5月の輸出の55.7%はCIS諸国向けで、さらにその73.8%がロシア向けである。輸入の場合は57.0%がCIS諸国からで、その75.6%がロシアからである。CIS諸国向け輸出品目の第1位は石炭、第2位は小麦であり、輸入品目の第1位はジーセル油、第2位は砂糖である。このように、独立後むしろロシアとの経済関係を強めている面がある (Focus…[1995], pp.13-14)。

第5節 カザフスタンの民主化と政党の結成

1. 民主化過程の始まり

ある組織体の真のアイデンティティの形成のためには、民主化が不可欠である。カザフスタンの民主化の画期は、1986年12月の、カザフ共産党第1書記がカザフ人からロシア人に代えられたことをきっかけとして起こったアルマ・アタの事件であった。この事件は、日本では「暴動」と訳されることもあるが、現在のカザフスタンでは、ペレストロイカによるグラスノスチ、すなわち政治的意見表明の自由の権利を利用した最初の試みであったとされている。この事件の意義は、カザフスタンのさまざまな社会的階層の住民の意思が、青年労働者のイニシアチブによって、中央とその地方の出先によって犯された不正に対して表明された、ということにある。これはカザフスタンにおける民主主義の萌芽を示すものであった。

民主化過程が現実発展するのは、88年、グラスノスチ、民主主義、多元主義の政策が徹底的に実行されはじめてからである。89年に旧ソ連で初めての候補者を選択できる議会の投票が行われた時、後戻りできない過程に入っ

た。89年、ナザルバエフがカザフ共産党第1書記に選ばれた。89年11月から90年3月にかけて、カザフスタンには、アルマ・アタ、アクチュビンスク、ジャンブル、カラガンダ、ウスチ・カメノゴルスクを中心に100以上の登録、未登録の社会団体が生まれ、89年末にはアルマ・アタで初めての独立の新聞『意見』などが発刊された。91年8月の政変の時ナザルバエフはクーデターの失敗が明らかになる前に対決の姿勢をとり、8月22日にはカザフ共産党をソ連共産党から脱退させ、第1書記を辞任し、社会党に改称するなど素早く対応した。この年の暮、カザフスタン初めての人民投票によってナザルバエフが、大統領に選出された。

こうして、政党の創立や社会・政治運動開始の条件が生まれ、政党や政治団体を下から形成しなければならないことが共通の認識となったのである。共産党の政治体制の崩壊、ソ連共産党の消滅、市場経済の全面的な導入は、新しい可能性を開いた。

これらは、カザフスタンの国内における政治的なアイデンティティの形成に大きな役割を果たすことになる。以下、2項でこれまでただ一つの政党であった共産党について歴史的に述べ、3項で現在の主な政党について簡単に紹介しておきたい。

2. カザフスタンにおける共産党

中央アジアの他の地域と同じく、ソヴェト政権成立の頃は、もっぱらこの地域のロシア人労働者や兵士の党であり、党員のなかのカザフ人の比率は少なかった。表1-8に示したように、1920年代末までに急速に増え、ほぼ人口にみあった割合となるが、実権はモスクワの中央党機関が握っていた。

社会民主党の組織は1905年革命期に誕生し、1916年蜂起の時アリビ・ジャンギリディンなどのすぐれたカザフ人の党指導者も生まれた。ロシア革命の17年には3月にオムスクやオレンブルクに党の組織が作られた。両都市は現在はカザフスタンの外でロシアに属するが、オムスクはシベリアだけでなく

表1-8 カザフスタンの党組織民族構成

	(%)												
	1922	1924	1925	1926	1929	1933	1937	1942	1944	1946	1953	1964	1972
カザフ(人)	8.9	11.6	29.2	36.5	40.2	53.1	48.8	46.1	35.1	42.8	40.4	33.3	35.1
ロシア	-	54.3	51.2	43.6	-	38.2	32.9	30.1	36.4	37.2	41.1	44.7	43.1
ウクライナ	-	8.0	6.4	7.0	-	-	-	11.5	13.8	10.3	10.4	11.4	10.2
タタール	-	1.3	-	1.8	-	-	-	1.5	1.6	1.9	2.1	2.1	2.1
ウズベク	-	-	2.8	4.3	-	-	-	1.2	0.9	1.0	1.1	1.1	0.9
ウイグル	-	-	-	-	-	-	-	0.6	0.4	0.5	0.4	0.5	0.6

(出所) Golikova [1972], pp.63,100,118,172,200,280,324より作成。

カザフスタンのアクモリンスク、セミパラチンスクの両州からなるステップ総督府の、オレンブルクはオレンブルク県とトルガイ州の行政中心地であった。南部では、シルダリア州とトルケスタン地方の行政中心地タシケントにも生まれた。すべてメンシェヴィキなどとの統合組織であったが、10月以降次々に分離してボリシェヴィキ独自の組織をもつようになる。

1917年にはトラル・ルイスクロフ、フサイン・イブラギモフなど後にカザフスタンの指導的な政治家となるカザフ人が入党する。

1918年3月には、ヴェルヌイ(アルマトイ)をはじめとしてカザフスタン全土にソヴェト政権が成立し、5月には党員数は約5000人になり、6月に開かれたトルケスタンの共産主義者の第1回大会には、トルガイ州とシルダリア州の代表も加わった。国内戦のなかで、東方、トルケスタン、アクチュェビンスク、セミパラチンスクの各方面軍部隊に党組織や支部が作られた。

シルダリア州、セミレチエ州の党組織はトルケスタン共産党に、北の党組織は1920年4月に創設されたロシア共産党の州委員会の権限をもつキルギス州局(またはキルギス党局)に属した。このように、1924年の中央アジア民族的・国家的境界区分までは、カザフスタンの党組織は南北に二分され、北はオレンブルクを中心としてロシアに、南はタシケントを中心とする中央アジアに属していた。

キルギス党局の創設は、ロシアの指導による一つの地域としてのカザフスタン結集の出発点であった。カザフ人を入党させるため、州、県、郡の党委

員会には、民族語での扇動、宣伝を行う、ムスリム、キルギス、キルギス・タタルなどの部が置かれた。このような努力によって、3年間に5000人のカザフ人が入党し、1920年にシルダリア州の原住民族比率は72.4%にもなった。

トルケスタン共産党のムスリム局には、バイ（この地域の地主）などの影響が強かった。また、カザフ人など中央アジア諸民族の党員のなかには、ムスリム局を独立の党に変えたいという意識が強く、その方向への動きが生まれた。1919年12月、ムスリム局は自分たちこそがトルケスタンにおける最高のムスリム党組織であることを宣言し、20年1月、ムスリム局および部の党員の地方協議会は、ルイスクロフの報告に基づいて、トルコ系諸民族共産党の結成を決め、第5回地方党協議会は、トルケスタン共産党をトルコ系諸民族共産党とすることを決議した。

これに対してロシア共産党中央委員会は、1919年2月に設置され、党中央委員会も全権を与えたロシア共和国のトルケスタン問題特別委員会の決定に基づいて、20年3月この部分を削除した決定を行った。しかし、ルイスクロフらはこれを認めず、5月にモスクワに代表団を送り、ムスリム軍部隊の創設やトルケスタン委員会の解散などを要求したが容れられず、逆に党地方委員会は解散され新委員会が選出された。ルイスクロフはまもなく自己批判し、37年に肅正されるまでロシア共和国人民委員会議議長代理（副首相）の地位に復帰した。同じような主張は次の段階ではスルタンガリエフによって主張され、23年6月に除名される。また、22年にブハラで反ソ・バスマチ運動を指導し、8月に戦死したエンヴェル・パシャは、20年にはコミンテルンとの連帯を表明していたのである。

これらの事件は、民族問題のいちばん難しいところをよく示しており、70年後の今日の事態を暗示しているように思われる。

1924年にカラ・キルギス自治共和国が創設された後、25年に党カザフ州委員会は地方委員会に再編成された。表1-8に示したように、当時は党員の半分以上はロシア人であった。

3. 1994年現在の諸政党

①カザフスタン社会党

91年9月の臨時大会の決定によって生まれ、旧カザフ共産党の後継と自認している。綱領では、社会的公正、自由、人々の連帯の社会の創設を主な目的として掲げる。94年1月現在の党員数は4万6798人で、労働者、事務職員、農民から構成され、多くの旧ノメンクラトゥーラを含み、国家機関のあらゆる分野に支部をもつ。30歳代が3割、40歳代が2割5分、教育水準は中等・高等教育修了者が大部分で、49以上の民族からなる。

②カザフスタン共産党

91年9月、17州148人の代表で再建を決定した。社会党と同じく共産党を後継する党と考え、大会の回数も引き継いでいる。93年10月の第21回大会で規約を定めた。科学的社会主義の原則と全人類の価値を優先する自由と社会的公正の社会をめざす運動を目的としている。マルクス・レーニン主義を堅持し、現在の条件に創造的に適用させようとしている。長く登録を認められなかったが、94年2月28日によろやく法務省に承認された。党員は4万8000人、1州を除き支部をもっている。以上2党が主な社会主義政党である。

③カザフスタン社会民主党

都市のインテリゲンツィアの党である。現在の改革の方法、私有化の過程、政治改革の過程に批判的である。組織的に弱体で影響力は大きくなく、登録もされていない。

「リベラル」としては、次のような政党がある。

④カザフスタン人民統一同盟

93年10月に創立大会。約5万人を結集した。政府を形成し、国家の重要なポストを占めているが、戦術的計画や依拠すべき社会層を固めておらず、知識層からも離れている。企業の私有化と国家による間接的規制を主張している。

⑤カザフスタン人民大会党

91年10月に創立大会、スレイマノフの人気と「ネヴァダ・セミパラチンスク」運動成功によって権威を高め、3万人を結集したが、決まった黨員をもたない。綱領では、「カザフスタン共和国発展の現段階は、全体主義的政治システムから民主主義への移行期である。経済の分野では、党は市場経済の基礎の創設を、精神生活の面では、世界文明の成果、全人類的理想と価値を基礎とする多元主義への移行条件の形成、法的な面では、法の支配を規定する。」としている。

民族主義政党・政治団体としては、次の二つのほか、ジェルトクサン、ラト、カザフスタンのロシア共同体などがある。

⑥アザト共和国党

「脱植民地化」を最優先課題とし、カザフ民族の創造、侵害された歴史的権利の回復、環境の改善などを掲げる。

⑦民族自由党「アラシ」

自らを「抑圧された反対党」とし、共産主義の「突然変異的な亜流」との闘い、トルコ系民族統一の思想の宣伝、トルコ・イスラム国家＝大トルケスタンの建設を目的としている。

ロシアでは95年12月の議会選挙でジュガノフの共産党が第一党となり、民族主義政党もかなりの支持を集めたが、このような状況下で、カザフスタン政府のロシアおよびカザフ共産党、社会党との関係が注目される。

第6節 カザフスタンにおけるイスラム

最後に中央アジアについて論じる時欠かすことのできないイスラムの問題についてふれておきたい。

カザフスタンにおいてはその民族構成からすると、宗教的にはイスラムとロシア正教である。ロシア帝国では十月革命前、ロシア正教は国教で信教の

自由はなかった。しかし中央アジアなどでは、イスラムは社会生活と一体となっており、また農村では旧来の支配関係を残して間接統治を行ったので、徹底することはできなかった。

十月革命後のペトログラートのソヴェト政権の宗教についての最初の布告は、1918年1月の「教会を国家から、学校を教会から分離することに関する人民委員会布告」で、これはソヴェト政権の一貫した方針であった。ここに述べられている思想は、特に社会主義的なものでなく、資本主義の下でも守られるべき民主主義的な原則である。これに対しロシア正教会は、総主教チーホンの下に革命の指導者たちを破門し、反革命側についてソヴェト政権と闘ったため、ソヴェト政権も政教分離という宗教政策を一步進め、ロシア正教攻撃の政策をとることになった。

このようにロシア正教に関しては、ソヴェト政権との関係は鋭い対立的なものであった。これに対しイスラムの場合は、むしろロシア革命によって法的には信仰の自由が認められたことになり、中央アジアなど労働者の少ない地域などにおいては、ソヴェト政権の樹立と発展のためにイスラム聖職者がかなりの役割を果たした。

中央アジアでは革命後、共産党の支部の名称もムスリム（イスラム教徒）局と呼び、1918年のトルケスタン・ソヴェト第3回大会の多くの代議員は、ナマーズ（1日5回の祈り）のために会議を抜けた。革命前イスラム社会の近代化をはかっていた青年トルコ党の流れをくむジャディドのグループの左派もやがて共産党に合流する。この地域の社会主義的改造は、イスラム聖職者の協力なしには不可能であった。ソヴェト政府は土地改革、女性解放、などの改革をとおしてイスラム勢力の基盤を掘りくずした。政府とムスリムとの協力は、1920年代末まで続いたが、共産党の強化、スターリンの実権掌握とともに両者の関係は変わり、聖職者のかなりの部分は殺害あるいは収容所送りとなり、モスクが破壊された。

ソヴェト時代、中央アジアの諸民族は他のイスラム世界との緊密な連絡をとることができず、ムスリムの儀礼的慣習などは民族的伝統に属するものと

見なされた。

中央アジアはイスラム地域であるといっても、信仰の強さは一様でなく、定住農耕民族であるウズベク人やタジク人の信仰は深くまた生活慣習と結びついていたが、遊牧民族であるカザフ人やキルギス人、トルクメン人はそれほどでもなかった。イランなどはモスクの建設を支援しているが、75年のソヴェト政権の支配を経た今日、カザフスタンでイスラムが大きな役割を果たすことはないと思われる。

＜参考文献＞

発展研究所出版物

- Arynov, E. M. i dr., *Postsovetskaya tsentral'naya aziya: mezhetnicheskie i mezhgosdarstvennyye problemy*, Almaty, 1994.
- Agayanov, V., *Programmnye dokumenty politicheskikh partii Kazakhstana*, Almaty, 1994.
- Babakumarov, E. Zh., *Oppozitsionnye politicheskie sily respubliki Kazakhstan: analiz tendentsii razvitiya*, Almaty, 1994.
- Babakumarov, E. Zh., *Dinamika partiinoy sistemy Kazakhstana v 1985-1994 godakh*, Almaty, 1994.
- Galiev, A. B., *Mezhnatsional'nye otnosheniya v Kazakhstane*, Almaty, 1994.
- Perushev, A. T., *Politicheskie aspekty mezhetnicheskoy konkurentsii v Kazakhstane*, Almaty, 1994.

百科事典，資料集，統計集類

- Kazakhskaya Sovetskaya Entsiklopediya*, Alma-Ata, 1981.
- Kazakhskaya SSR, Atomnaya kratkaya entsiklopediya*, Alma-Ata, tom1 1985, tom2 1988, tom3 1989.
- Sovetskaya istoricheskaya entsiklopediya*, tom6, Moskva, 1965.
- S'ezdy Sovetov v dokumentakh*, Moskva, tom1 1959, tom4 ch. 1 1962, tom7 1965.
- Konstitutsiya SSSR, Konstitutsii Soyuznykh SSR*, Moskva, 1978.
- Sel'skoe khozyaistvo SSSR, ezhegodnik 1935*, Moskva, 1936.
- Narodnoe khozyaistvo SSSR v 1990g.*, Moskva, 1991.
- Strany-chleny SNG*, Moskva, 1992.
- Sodruzhestvo Nezavisimyykh Gosudarstv v 1994godu*, Moskva, 1995.

その他

- Ayaganov, B., *Gosudarstvo, Kazakhstan:evolyutsiya obshchestvennykh sistem*, Almaty, 1993.
- Beisembaev, S. B. i dr. (red.), *Voprosy istorii Kompartii Kazakhstana*, Alma-Ata, 1977.
- Beisembaev, S. B. i dr. (red.), *KPSS i Sovetskoe pravitel'stvo o Kazakhstane*, Alma-Ata, 1978.
- Dzhunusov, M. S. (ot. red.), *O zakonomernostyakh perekhoda narodokh ranee ostalykh stran k sotsializmu*, Alma-Ata, 1961.
- Golikova, Z. i dr., *Kompartiya Kazakhstana za 50let*, Alma-Ata, 1972.
- Kainazarov, E. K. i dr., *Istoriya Kazakhstana*, Alma-Ata, 1992.
- Kozybaev, M. K., *Ychebnoe posobie po istorii Kazakhstana s drevneishiv vremen do nashikh dnei*, Alma-Ata, 1992.
- Nurpeisov, K. (ot. red.), *Aktual'nye problemy istorii Sovetskogo Kazakhstana*, Alma-Ata, 1980.
- Svoik, P. i dr., *Sud'va Kazakhstana kak gosudarstva*, Almaty, 1994.
- Sirgebaev, B., *Glubokie korni bratstva*, Alma-Ata, 1977.
- Tabyshalieva, A., *Bera v Turkestane, Bishkek*, 1993.
- 木村英亮『ソ連現代史 2.中央アジア, シベリア』, 山川出版社, 1979年, 増補版1990年.
- 木村英亮『スターリン民族政策の研究』, 有信堂, 1993年.

雑誌論文

- Arenov, M i Kalmykov, S., "Sovremennaya yazykovaya situatsiya v Respublike Kazakhstan," *Evrasiiskoe soobshchestvo: ekonomika, politika, bezopasnost'*, No. 3, 1995.
- Askarov, T., "Pattern of Population Movement in Kazakhstan," *Focus Central Asia*, No. 9, May 15, 1995.
- Baitenova, N. D., "Mezhetnicheskaya integratsiya v Kazakhstane: sostoyanie i perspektivy," *Soyasat*, No. 3, Avgust, 1995.
- FSA staff writer, "Demographic Explosion in Central Asia has ceased," *Focus Central Asia*, No. 9, May 15, 1995.
- Kotov, A. K., "Edinoe grazhdanstvo-konstitutsionnaya osnova ravnopraviya v Respublike Kazakhstan," *Soyasat*, No. 3, Avgust, 1995.
- "A Statistical Portrait of Kazakhstan's foreign economic activity," *Focus Central Asia*, No. 15, August 15, 1995.
- Vestnik statistika*, No10, 11, 12, 1990, No. 4, 5, 6, 1991.
- Kazakhstanskaya pravda*, Fevralya 2, 1990.